

アーバンデザインセンター
びわこ・くさつ
キックオフイベント

2016

基調講演・パネルディスカッション
講演録

開催概要

日時：2016年10月15日 午前10時～12時



場所：草津市民交流プラザ 大会議室



草津歌劇団による祝舞

UDCBK KICKOFF EVENT

プログラム

一部 祝舞・オープン宣言

1. 祝舞
草津歌劇団「大好き草津メドレー」ほか
2. 挨拶 橋川 渉 草津市長
松原 豊彦 UDCBK 運営懇話会座長
3. 祝辞 中嶋 昭雄 草津市議会議長
4. UDCBK スタッフ紹介

二部 基調講演・パネルディスカッション

5. 基調講演①
出口 敦 UDCBKセンター長
基調講演②
及川 清昭 UDCBKセンター長
6. パネルディスカッション
肥塚 浩 (コーディネーター)
7. フィナーレ 合唱コーラスグループ
カラース「出会いの街くさつ」



カラースによる合唱

 基調講演 講師プロフィール

出口 敦 氏

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 東京大学工学博士

専門は都市デザイン学、都市計画学 九州大学助教授、教授を経て2011年4月より現職 UDC K（柏の葉アーバンデザインセンター）、UDC 2（千葉県柏市）、UDCT（福島県田村市）のセンター長、全国のアーバンデザインセンターネットワーク代表を務める

及川 清昭 氏

立命館大学理工学部建築都市デザイン学科教授 東京大学工学博士

専門は建築・都市計画学 東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授を経て2003年より現職、学校法人立命館キャンパス計画室長 現在、草津市空家等対策推進協議会・副会長、アーバンデザインセンターびわこ・くさつ事業運営懇話会委員・同センター長に就任

 パネルディスカッション パネリスト

コーディネーター

肥塚 浩 大学地域連携強化プラン懇話会座長（立命館大学教授）

パネリスト

出口 敦 UDC Kセンター長（東京大学大学院教授）

及川 清昭 UDCBKセンター長（立命館大学教授）

福井 太加雄 草津市まちづくり協議会連合会会長

橋川 涉 草津市長

全国に広がるアーバンデザインセンターネットワーク

基調講演1 出口 敦 UDCKセンター長



出口敦氏講演風景

● まちのデザインとは

一般的に「アーバンデザイン」という言葉には馴染みがない方が多いと思われるが、私たちが「まちづくり」という言葉より「アーバンデザイン」にこだわっているのは、都市・まちというのはデザインするものだとして常々考えているからです。例えばこの草津市は雄大な琵琶湖など自然に恵まれた都市であるが、自然は人間がつくったものではない。そういった自然に対して 都市・まちは正に人間がデザインして造っていかなくてはならず、デザインしないといいまちはできてこない。アーバンデザインとは正にまちをデザインしていくということ。様々な立場の方が一致団結して協力することが必要で、アーバンデザインセンターはそのための拠点となる。あとひとつ大切なのは都市やまちは住み続け暮らし続けるためのものであり、人間が造ったものであっても使い捨てにしてはならず、うまくマネジメント・運営していかなくてはならない。これはひとりの人間にできるものではなく、そこに住んでいる人、活動している人、行政、民間企業、事業者の方々、大学、学生、皆が協力していかないと楽しく魅力的なまちで暮らし続けて行くことはできない。そのためにアーバンデザインセンターが必要となる。

● 柏の葉アーバンデザインセンター

柏の葉アーバンデザインセンター(以下UDCK)は10周年を迎える。創設に尽力された故・北

沢猛先生のお考えのひとつに公民学連携を中心とした体制づくりがあった。一般的に使われる言葉は産官学連携だが、この中には市民・住民は存在しない。公民学連携の民は市民・住民・民間企業の民でもある。それから産官学の官は行政だけだが公民学の公はNPO等も含まれ、行政だけではなく公共的な活動、ボランティア活動する人々も含まれる。産官学の学はどちらかというと学識者の学だが公民学の学には学生も含まれ、ぜひ学生にもまちづくりに積極的に参加して欲しい。このように公民学の連携で体制を進めるといったことがアーバンデザインセンターのひとつの基本的な考えとなっている。このアーバンデザインセンターびわくさつ(以下UDCBK)も公民学連携の体制を整えて本日スタートすることと思われる。

千葉県柏市は人口40万人で、草津市は13万人なので3倍の人口規模となるが、区画整理事業と新駅を中心とした街づくりという点で共通する背景がある。この草津市でも20年前に南草津駅が新設され区画整理事業が進んだが、柏の葉でも11年前に東京の秋葉原と茨城県のつくば市を結ぶつくばエクスプレスが開通し、農地やゴルフ場、或いは隣接して米軍基地があった関係でそこで新規に開発が進んでいる。区画整理事業では多様な地権者の方々が平等に利益を分かち、土地を持つ方すべてが参画できるような形で換地する。計画を先に確定したあとで長い年月をかけて区画整理事業を進めていくが、ある意味それは事前確定的な計画であり、年月を経ることにより社会情勢や経済情勢が変わるのでその間の調整も必要となる。その後道路や下水道、インフラが出来上がってくるとその上の土地に地主の方々は施設をつくることになるが、各々が土地を最大限活用しようと自分の土地周辺に限ったミクロの範囲で最適解を得ようとされる。区画整理事業と

というのは本来全体の最適解を目指す事業なので、全体の最適解と部分の最適解に齟齬が生じる。例えば本来計画のない場所に駐車場が必要になった場合は道路のひき方が変わり、並木を計画したいが施設によっては木を切ったり、道路の取り付け方を変えなければならないといった調整が必要になってくる。そういったそのときになって初めて起こる予想できない問題に対して、柏の葉では、あらかじめ街の中に調整する機能を埋め込んでおこう、ということでUDCKが発足した。まちづくりは現場で調整が必要になるもので、現場で情報を発信したり集めたりするという意味でこの草津市でもUDCBKが、現場にセンターができて街をつくるといった機能が期待される。

● UDCの成り立ちとネットワーク

最初のアーバンデザインセンターの組織は行政の内部につくられたと思われる。日本で最初に取り組んだのは70年代からずっと都市デザインに注力してきた横浜市で、行政のなかの縦に割られた道路、建築、公園をつくる魅力、そういったことを横に調整する役割としてアーバンデザインの組織が役所の中にできた。ところが民間の活動が活発になってくると民間の方々との連携が必要となり、まちづくりの組織が行政の自治体主導の外郭団体化していった。これがいわゆるまちづくりセンターというもので、全国に現在、150ヶ所近く市町村の外郭団体として存在する。この外郭団体は住民の活動に対して補助、助成したりする組織が中心で、お金も人も行政から出ている。アーバンデザインセンターは、公民学連携なので行政の外郭団体ではなく、大学の下部組織でもなく民間企業の一部局でもなく、自立した組織である。公と民と学がそれぞれ資金や人材を出し合って運営していくのは大変だが、独立した組織であれば、行政の方針が変わってしまうと途端にセンターの事業が止まってしまう事態は避けられる。公と民と学、これから色々な困難があるだろうが互いに知恵を出し合って協力して進め、何より

も活発な活動を続けていくことが大切である。センターという意味は「活動が集まる」ということであり、まちづくりというのは活動を担う人が集まる場、情報が集まる場が必要。街というのは生き物のように常に動いていて、そういった情報は地元の方が常に持っていて、活動が集まり、人が集まり、情報が集まると自ずと問題も集まってくる。その地域でどういった問題を抱えているかということが集まり、その問題を皆さんで知恵を出し合い、解決していく。あるいは大学の分析の専門家、建築の専門家、都市計画の専門家、色々な分野の関係者がその問題を分析しその課題に対応していく、そういった意味での中心としての「センター」であり、ぜひそういった活動のモデルとなしてほしい。

今日オープンしたUDCBKは全国で13番目のUDCですが、来月には東京都板橋区の高島平にUDCTACがオープンする。こちらは旧公団、現在のURが作った巨大な団地があり高齢化の進んだ団地の再生や活性化を中心的な課題とするUDCとなる。柏の葉は区画整理事業によるニュータウンをつくる中心的な役割を担うUDC。2008年発足の福島県の田村地域デザインセンター(UDCT)では当初は農村過疎地の再活性化が中心的な役割でしたが、一部福島原発事故の20キロ圏内にあり 東日本大震災後は一時期3000人が避難、現在は避難解除され住民が戻り始めていて復興計画のお手伝いという役割も担う。また、愛媛県松山市のUDCMでは市街地中心部の活性化が主な役割である。このように全国にあるUDCは都市の特色によってひとつひとつ課題が異なるが、方法は共有できると思われる。そういった課題に対する解決策を共有しようということでUDCネットワークを作り、私とその代表を務めさせていただいている。これからもUDCは増えていくと思われるので、UDCBKも参加いただき、草津からの情報を発信、あるいは草津で学んだことを我々と共有いただきたいし、ネットワークでもぜひ応援させていただきたい。

私は大学では都市空間デザインの研究室を持ち建築都市デザイン学科で教えているが、アーバンデザインとは都市デザインを意味する。今回、机上の研究や講義だけでなく、都市デザインの活動の場として、このアーバンデザインセンターびわこ・くさつのセンター長に任命された。



及川清昭氏 講演風景

● 現代都市が直面する7つの課題

UDCBKの目指すところとして、現代都市が直面する課題を7つ挙げる。①人口減という人口問題。先ほどUDCの課題はそれぞれ違うという話があったように草津市ではまだ直面していない問題だが、いずれ少子高齢化すると予想される。②安全・安心という面で防災、防犯、特に最近では地震や災害の問題がある。③資源、大量消費、ゴミ問題 ④歴史、文化といった地域の個性やアイデンティティの存続 ⑤経済停滞、活力の低下、コミュニティの消失 ⑥環境問題。地球環境問題に代表されるように大都市のヒートアイランドなどが問題となっている。⑦モータリゼーション。自動車依存社会がひいては大量資源消費に至る。地方都市ではどうしても自動車に依存せざるを得ないので歩く町、自動車依存の町のバランスをどうするか、そして今もって自動車道路の未整備問題です。三つに集約すると人口活力の問題、環境・文化の問題、防災の問題、という課題が浮かび上がる。

● UDCBKの5つの役割

UDCBKはなにをやるか、①民産公学の交流学習、②将来像を共有、③活動を実施、④街づくりの情報集約・発信、⑤マネジメントといった役割があり、大学等の専門家が課題解決などで支援する。まずUDCBKの役割として①交流学習においては地域を知ってお互いを知るための街歩きや交流会として、地域資源発掘ツアー、アーバンデザインスクールといった学習会を実施する。地域を知るという意味では、草津は「住みよさランキング」の近畿ブロックにおいて4年連続1位、全国でも20位と秀でているが、快適利便性で優れている反面、安心度と住居水準の充実度が落ちるという結果もふまえて活動していきたい。元来、WHOの都市の規範に利便・快適・安全・保健の4つが住民の要求、住環境の評価基準とされていて、「利便性」は交通や買い物、「快適」は公園やオープンスペースのある豊かなまちづくり、「安全」は防災・防犯、「保健」は肉体的精神的な健康をまちが守るということで物理的に日照、通風がよいことなどがあげられる。近年、「持続可能性」が加わって5つの規範となった。また、全国的に浸透しつつある持続可能な都市モデル、スマートウェルネスシティとして「健幸都市」を掲げるのは滋賀県では草津市のみで、ぜひ応援したい。②将来を共有する場ということですが、草津市でも総合計画、都市交通マスタープランなどたくさんの基本計画が示されているが、まちに住む人が想像しやすいようイメージパスやモデルを利用して一緒に考えていくことが大切である。③活動実践においては、立命館大学調査研究の専門分野の方がたくさんいるので、ぜひ一緒に活動していきたい。④情報収集・発信では、NPOや行政といったネットワークをUDCBKが集約する中心、ハブとなってまず情報を収集し、活動を発信するというのが

目指すところ。⑤まちのマネジメントにはふたつあり、まずデザインマネジメントで町並みのルールなどデザインの誘導・支援を行う。それから地域のマネジメントとして住民、事業者、地権者の主体的な取組みを支援する。草津市でもエリアマネジメントが提案されているがUDCBKには独自のデザインマネジメント、エリアマネジメントの役割がある。

● 「SOLUTION」を主題としたまちづくり

ソリューション(SOLUTION)の頭文字に因んだまちづくりを説明する。サスティナビリティ(S)ではこれから大学のあるまちとしても、草津市と立命館大学が一緒になって環境、社会、経済

など持続可能な社会になるよう考えていくまちづくりを目指す。オーバーレイ(O)は歴史を塗り重ねるという意味としては、草津宿の歴史がある一方で若い方も多く、歴史と若さが同時に存在する強みを持ち合わせて活力となると期待される。ローカリティ(L)はグローバル化に対し、地域性の維持継承を目標とする。又、多様(T)な主体が交わる個性(U)ある都市として草津のアイデンティティ(I)になる。そして最後、自然(N)ですが、一般の人に草津市に琵琶湖のイメージがないという問題もあるので、我々の宝である琵琶湖と共生するまちづくりも大切となる。このようにUDCBKがオープン(O)な住民参加や情報提供を行い、草津市の都市生活の向上に資する役割を担って行きたい。

UDCBK への期待と課題

パネルディスカッション

肥塚: UDCBK発足にあたりましてその期待と課題についてパネリストの皆さんにご意見をあげていただきます。

先ず、最初に草津市、あるいは南草津にどういった特色があるかということ踏まえてUDCBK、公民学連携についてお話していきます。南草津の駅が出来て20年あまりということですがそれぞれどういった地域の特性や活動があるのかということ草津市長と福井会長からお話いただきます。

橋川: 草津市及び南草津駅周辺は住みよさランキングにおいて近畿で4年連続1位というようなこともあり、転入される方も多い状況でまだまだ増加傾向にあり、今現在の草津市人口は132,000人でございます。しかしながら市内には14の小学校区がございまして草津の小学校区ではすでに人口減少が始まっており、市全体では高齢化率が21%、3つの学区は30%と超高齢化が進んでいて非常にアン balan

スで、学区ごとにみても非常に過密な地域と混在する大きな課題があります。市全体をいかに元気な街にしていくかということがあり、空き家や空室の問題もある。また、駅周辺はマンションが多く子育て世代が多いなかでコミュニティが希薄になっている。意識調査あるいは草津未来研究所の調査研究では交通や買い物が便利とあるが市内で活動する場所や機会が少ない、人との結びつきが難しいなど社会関係の部分が課題ですが、最近では市民活動グループの方々が活発な動きをされ、14の学区でまちづくり協議会においても実質的なまちづくりをそれぞれの特性をふまえて活動していただいている。といったところが、草津市の現状であり、課題でもあります。

福井: 私は40年あまりこの草津の地でまちづくりに携わってきたが、何もなかったところから、行政の方や商工会議所の方々のご尽力もあり、平成6年に南草津駅を造り、同時に立命館大学もオープンし、人口も30年前から4万人増

えた。従来から草津は東海道と中山道を結ぶ交通の要衝であり、明日いよいよ京へ上るといふ最後の宿駅である立派な本陣も構え、歴史・文化が栄えた場所です。この地がどうして街にならないのか、という思いからアンケート調査などはじめ、皆様への注意喚起、協力の呼びかけ活動が功を奏したものと思う。

しかし駅ができて、何もないという状況に気づき、子育てに困る若い母親が目につくようになった。そんな中、若い母親たちが子育て応援ネットワーク「玉っこひろば」を作り、市民センターや地域の集会所を使用し、メールを活用して驚くほど多くの人を集めるなどして元気に仲間づくりに成功されている。

ただ残念なことはマンション住まいの方は早朝京都や大阪へ出勤され深夜帰宅されるため地域とのコミュニケーションが難しいという点で、こういった方々も地域に出て活動できたらという思いで立命館大学の先生にご指導いただき、玉川で健康体操を実施したり、「みなくさまつり」を開催し、たくさんの方に参加いただき皆さんに喜んでいただいている。こういった集まりでまちをつくってきたことを実感する。

肥塚： 続きまして本日UDCBKが発足することの期待について市長と福井会長よりお話いただき、それに対するコメントを先生方にお伺いしていきます。

橋川： これまで学生、企業の方、市民が互いに交流する場はなく、それぞれで交流、活動されてきた。UDCBK発足により、それぞれの立場の方が一堂に会して課題を話し合ったり、まちづくりを話し合うなかで大学のアドバイスなどいただきながら新しい動き、活動となっていくことが大いに期待され、課題の解決につなげたい。これらを草津市では社会実験として受け止め、新たな施策として展開される機会と捉えている。また、立命館大学では留学生の方がたくさんおられ、既に各地域の消防団の団員になっていただいているが、更なる外国の方々との交流、

多文化共生についても、もっと活発にUDCBKをプラットフォームとして活用されることを期待する。

福井： この地においては、近年滋賀県から移管された文化ホールに幼稚園や学校の発表会などで毎日600人が集まって文化交流され、また全国で小学校が統廃合される人口減のなか、新たに老上西小学校が開設となり、嬉しい悲鳴をあげている。

そこで気軽に立ち寄れる駅前にこのUDCBKがオープンし交流が広がることが期待される。草津市をご存知ない方がUDCBKに来ていただいております。お話いただければ一層仲良い南草津のまちができると期待している。

及川： 立命館大学がUDCBKで何を期待されているかということを考えてみる。今、立命館大学ではキャンパスフロントゾーンといってキャンパスの高速道路側を地域開放して大学と地域の方々が交流できるようにするための会議を進めている。市民が気軽にキャンパスの前に集まっていただけるようなスポーツ、健康、今度立命館大学でオープンを予定している食科学をテーマとしてなんとか市民と交流していこうという方針で検討しているが、こういった情報は草津市や市民に伝わっていないかと思う。まさに学習交流の場、プラットフォームに大学、草津市民や企業が集まり、それぞれ考えていることを発表、意見交換し、ここUDCBKで話が始まる、そういったことを期待している。

出口： ひとつは、まちづくりのテーマ。それぞれの地域の資源、大学や歴史などを活かしてまちづくりの具体的なテーマを共有して柱をたてることがまず大切です。加えて、私たちUDCKとこちらUDCBKは地区限定のアーバンデザインセンターです。柏市全体のことでなく、我々のミッションは柏の葉270haくらいの区画で地区の将来図を描くのが我々の仕事。柏市には別にUDC2というアーバンデザインセンターが中心市街地にあるが、おそらくUDCBKでは草津市全域のことを考え、地区の具体的な

事業を発足させながら全域のことを考えるという2面性があるかと思う。両方のことを考えながらアーバンデザインを考えていく、ということに期待している。

肥塚： テーマをどのように設定していくか、手探りで始めていくのですが走りながら考えていきたいと思う。アーバンデザインセンターびわこくさつの「BK」には草津全体を考えていきたい、更には琵琶湖といった、それにとどまらない南草津を出発点とした草津のアーバンデザインについて考えていきたいという思いが込められているように思う。

それでは引き続き産学公民で連携していく点について議論いただく。

橋川： テーマの課題設定は非常に大切で今後の話し合いの中で決まっていくかと思われるが、一例を挙げると草津市では今年8月に「健幸都市宣言」を行いました。市全体で子供から高齢者まで全ての人々が健康に生活できるまちづくりを目指している。まず、まちの健康、まちに住んでいるだけで健康になるというデザインをしていこうというもので、次にひとの健康では運動、スポーツ健康科学、食科学ということで立命館大学から見解をいただき連携の中で健康を、そして仕事の健康という面では草津市内のパナソニック、オムロン、ニプロなど医療健康分野の企業との連携の中で健康の仕事づくり、ヘルスツーリズムなど活性化にも役立つようなしくみづくり、幅広い健幸都市づくりということを計画している。一例だがそういった分野を深堀し、このUDCBKでもとりあげて おおきく育てていく様な、新たな展開を望んでいる。

福井： これまでは、駅前のマンションにお住まいの方やこの地域にお勤めの方はお忙しく、交流するのは非常に困難な現状でしたが駅前のこのUDCBKなら来られるという方もあると思われる。隣に終日営業の西友もあり、時間を選ばずに立ち寄れるが、まちづくりにもそんな風に便利に気軽に立ち寄れて話ができる拠点が必要なのでUDCBKの立地は有利。

まちをつくるのは容易だがそのなかで人と人との信頼関係はなかなか調整できない。このUDCBKをうまく活用し、色んな人と経験や知識を参考にまちの未来の選択肢を増やしていきたいし、皆にとって居心地のいい魅力ある場所にしたい。

立命館大学でも天体望遠鏡を市民に開放する日を設けるなどしていただければありがたいし、大勢で交流できる場所づくりにご協力いただきたい。

及川： 立命館大学としては、スマートウェルネスということで草津市とスポーツ、健康、食において交流しようと議論を進めている。UDCBKで最初に扱うテーマとして非常にタイムリーで適している。それから立命館大学では私立としては珍しく地域連携課があり、今後UDCBKとの連携が保てる状態にある。学生の面でも14,000人が在籍し出席率が6割としても8,000くらいの人々が、このまちで活動をしているわけです。そのうちの1割でもUDCBKと関われば膨大な数になってそこで市民とふれあえるというわけです。実際に職員や学生は地域で活動していて地域連携課がつくった地域連携の事例は、100くらいはあり、期待されているプラットフォームの素地があり、あとはそれをうまく活用、回転させていくという状況です。

出口： いま及川先生が言われたように決してゼロからのスタートではなく、テーマやキーワードも皆さん共有され、きっかけづくりをされており、具体化するための場所としてスタートすることがよくわかりました。幸せという字を書く「健幸都市」という発想も初めて知るが、非常に素晴らしい。私が以前九州大学に勤務していた折は通勤時間が15分だったのですが、東京へ移って渋谷に在住しているために現在柏の葉まで通勤時間が往復3時間もかかり、つくづく思うのは健康とか幸せには非常に「時間」というものが重要な要素となるということです。可処分時間というものがひとつの大きな指標になるかと思う。琵琶湖のある草津に暮らすということは身近に豊かな自然があり、街もコンパクトにできており、

アクセスの良さ、移動時間が短い分、可処分時間が非常に多いかと思しますのでその優位性をうまく活かしていただきたい。

あと、新規の住民の方との交流の場についてですが、柏の葉でも同じ問題を抱えており、UDCKが中心となってまちのクラブ活動というものを20ほど新規住民主体で活動している。UDCK施設は東大の施設のなかに入り、市民の方が自由に入出入りできなくなったが3年前までの施設では市民の方が自由に入出入りされて街のクラブ活動の場でもあった。主婦の方が朝早くからヨガ教室をされたり、週末はお子さんの英語教室、あと千葉大学の先生の指導を受けながら蜂を育て蜂蜜をつくって商品化していくようなはちみつクラブ、そういった市民のクラブ活動があってもいいのではないかとということで、参加される市民の方のメーリングリストも膨大で、そういった情報の流通もあり、おそらく色々な役割をUDCBKに託されるものと思います。

肥塚: 草津市は連携ということで大学ではこちらの立命館大学をはじめ、滋賀大学、京都橘大学、成安造形大学、滋賀県立大学と、草津市と関わりの深い5つの大学と包括協定を結んでおり、それぞれの課題やテーマについてこのUDCBKでともに取り組んでいきたい。

また、大学だけではなくキーワードで言うと専門家ということがあげられます。単に大学の専門家というばかりでなく実際こちらにお住まいだったりお勤めだったりする方それぞれの専門家としての知見をUDCBKで活かしていただけることが大変重要かと考える。

それでは、最後に市長とセンター長より今後の期待と課題についてひとことお話いただき、終わります。

橋川: 皆さんのお話を伺ってきて、期待はふくらむわけですが、まずどのようにしてUDCBKという場にたくさんの方が来ていただけるか、そういう場としてのアピールを行い、リピーターをつくることです。来ていただいた方に得るものがあったり、ここへ来たことをきっかけに新たな活動を

始めたりといった良いサイクルが生まれるような運営をしていきたい、というのが運営側の課題である。

及川: UDCBKでは活動の可視化が重要になってくるかと思う。周囲から見えることが非常に重要かと思っていて、以前見学したUDCKでは、市民がそこで食べたり話したり、議論している様子がまわりから見える、そういった場所づくりとともに位置ということが重要で、要望としては（駅前の路面など）見える場所で、みなさんと活動できることを期待する。

肥塚: 大変短い時間でしたがパネルディスカッションさせていただきました。

UDCBK発足にあたり、センターへの期待と課題についてここで示すことができたかと思いません。こういったことも色々な形で見える化をしていく必要があるということでしたので今後とも情報発信していきたいと思えます。

本日はみなさま、ありがとうございました。